

## 第 41 回 - 生駒山地を巡る 3)河内湖の変遷 -

奈良北部から生駒山地を西に越えるルートに清滝峠がある。現在は清滝トンネルが開通し、国道163号を東から来る車は、ほとんどトンネルを通り四条畷の中心部へと直線的に下っていくが、「遊ぼう連」の我々は清滝峠への旧道に入った。曲がりくねってはいるが旧道は寂れておらず、ゴルフ場があって峠の集落は豊かそうな構えであり、また河内平野・大阪市の眺望は素晴らしいものであった。国道の長い下り坂の半ばに合流、更に下って左折し東高野街道に降りて、目的地の四条畷市立歴史民俗資料館を訪れた。

土蔵づくりの建物を入ると、入り口右手に「河内平野の成り立ち」の点灯式模型案内地図が置いてある。 (図1.河内平野の発達)縄文時代前期前半(約6000年前)に、地球温暖化により海水面が上昇する「縄 文海進」のため、現在より海面が5~7m高かった。そのことは地質調査や貝塚の分布調査などで明らかで

ある。その当時日本列島の現在の 平野はほとんどが海底であったと いわれるが、その判りやすい例と して河内平野がある。今問題の、 二酸化炭素を原因とする地球温暖 化の結果起こる海面の上昇や、南 海大地震による津波によって、海 没が予想されているのは図1に示 されている縄文時代の赤線に区切 られた地域である。縄文海進期が 終わって気温は下がり始め、それ に伴い南北極など地球各地で氷河 や氷床が形成され、そのために海 水面は次第に数メートル低下して 現在に至っている。最初は海であ った河内湾は、海水の流入が次第 に減少して汽水の潟となり、河川 の流入・土砂の堆積もありついに 河内湖となった。東に生駒山地、 西に湖が広がるこの地は、西から 瀬戸内海を渡ってくる海人の目標 「太陽の出る山の麓」、草香江と名 付けられた。

讃良川流域の更良岡山遺跡(縄文)からは、豊かな生活を思わせる大量の土器や石器、祭祀用の道具などが出土している。その少し下流の讃良郡条里遺跡から出土した弥生式土器・炭化米を放射性炭素年代測定法で測定したところ「2500年以上前」の結果が得られている。さらに、南東1.5キロほどに雁屋遺跡があるが、ここは弥生中期の頃には大集落となっていた。

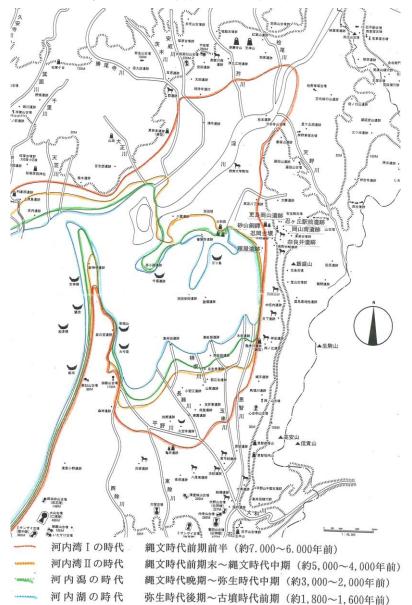


図1. 河内平野の発達

当然、喪葬儀礼も盛んとなって方形周溝墓が作られ、そこからは様々な出土品がでている。また倭国大乱の時代 (AD150~185) には、この地と日本海側とで鉄等の物資の交易が盛んに行われていたことも出土品から 判明している。これらの資料は館の常設展示として見学することが出来、たいへん興味あるものである。

さて、古墳時代の中頃となると、この地に朝鮮半島から渡来人が次つぎに到来し、様々な最新の技術を伝 えた。なかでも、渡来人のもたらした馬と、その初期の飼育がここで行われたことは重要である。四条畷市 立歴史民族資料館は開館30周年記念事業として、そのあたりに焦点をあて特別展「継体天皇と河内の馬飼 い」(2015.10.6~12.13)を開催した。大阪周辺の遺跡から出土した馬に係わる資料、今城塚 古墳の出土品、高島歴史民俗資料館と若狭町歴史文化館からの王冠や馬具等が集められて、展示された。

一世を風靡した「騎馬民族征服王朝説」(江上波夫、1967)がある。東北ユーラシア系の騎馬民族が 南朝鮮を支配下のち、日本列島に入り4世紀後半から5世紀に大和地方の在来の王朝を支配、合作して大和 朝廷を作ったという壮大な仮説である。当時の考古学的成果、記紀などの神話・伝承と東アジア史を総合検 討したロマンに満ちた学説として、喝采を浴び20世紀を通じ多くの議論が行われたが、残念ながら否定さ れるに到った。この時代の渡来人の大挙渡来は、高句麗の南進から始まった朝鮮半島の動乱、新羅・百済の 興亡等の結果によるものである。高句麗王の墓碑に記されているように、この間「倭人」は遠征して、高句 麗の騎兵隊と戦い敗れている。信州・群馬などで4世紀とされる馬・馬具の出土がみられるのは、この戦いに 係わった武人が到来したものであろう。

日本書紀には、応神天皇15年(5世紀前半)、百済から良馬2匹(古事記:牡・牝)が贈られてきて、 大和の厩坂で飼育したと記されてある。その後、馬の飼育は幾多の困難を克服し、この地の讃良の牧におい て順調に進展した。その牧は図1で馬形の印がある、生駒山地の山裾、東西約2キロ、四条畷から寝屋川ま での南北約3キロの範囲である。馬は体高125センチ前後の蒙古系の馬で、この血統の馬は現在も木曽・ 開田高原の牧場で飼育保存されている。牧から百済の栄山江流域の土器が出土することから、馬の飼育は百 済人があたっていたと推定されている。この牧は日当たりの良い斜面で、栄養価の高い牧草が繁茂し、湖や 川は自然の柵となっていた。讃良の牧における飼育の実態や馬飼の里の暮らし、祈りや祭りなどはこの資料 館の常設展示で知ることが出来る。

馬はどのように輸送されてきたか、調教した馬を船に乗せ、瀬戸 内海経由で数ヶ月も掛けて運んできたと云われるが、飼料や飲水の ことを考えても航海日数の少ない日本海航路を経由する方が合理 的と思われる。 蔀屋北遺跡で準構造船をリサイクルした井戸が7基 出土し、その1基が朝鮮半島で船に使われるモミ材である事が瀬戸 内海説の根拠であるという。その船で馬が運ばれてきたのかも知れ ないし、そうでないかも知れないと思う。

この放牧地は広さに限度があり、より大規模な適地へと馬の飼育 は移行し、讃良の牧はやがてその役割を終えることとなる。馬の飼 育は列島に広がって、ついには百済に馬を送る様にもなったという。 そして、そのまえにヲホド王(継体)の登場がある。越前・三国を 本拠としていたヲホド王は日本海から琵琶湖・淀川水系の舟運を抑 えていた。当然のことながら彼は以前から、淀川の河口につながる 河内湖とその沿岸部の首長・河内馬飼首荒籠と親交を結んでいた。 河内湖周辺を図2に示すが、このころにはすでに難波の堀江は開通、 淀川治水の茨田の堤も完成していた。

ヲホド王を天皇として迎えるための使者の天皇即位の要請に対 し、情勢に疑問を持ったヲホド王は態度を明らかにせず返答を保留 した。その時に活躍したのは河内馬飼首荒籠で、素早く情報を収集 して、ヲホド王に送った。それによって王は皇位につくことを決断 し、第26代継体天皇となった後も、荒籠の情報収集力・軍事力を

城塚古墳 大阪湾 大山古墳 曾田御廟山 古墳 陶邑古窯跡群へ 図 2. 河内と継体天皇宮跡

高く評価し厚遇した。図2を見ると、継体が宮を設けた場所と、荒籠の勢力範囲が微妙に呼応していること が判る。そして継体は体制を引き継ぎ、まさに騎馬の新王朝を開いたのだと見ることも出来る。

(岡野 実)

図1および2は四条畷市立歴史民族資料館提供の資料より引用致しました。